

「宗教と科学の対話研究会」の皆様

暑さ寒さも彼岸まで、と申しますが、如何お過ごしでしょうか。

一昨日(9月12日)、京都市内のホテルで開かれた「鎌田東二さんに結ぶ会」に参加させていただきました。鎌田さんが他界してから、もう百日経ちました。結ぶ会当日は、懐かしい方々にお会いしました。東大の島蘭さん、鶴岡さん、京大のベッカーさん、河合さん、吉川さん、小倉さん、皇學館大の櫻井さん、山梨大の木村さん、浅井さん(稲盛豊実さん秘書)、飛騨高山の大下さん、同志社の奥井さん等々。内田樹さんや上田紀行さんの姿もありました。百人ほどの集まりだったのですが、知り合いは十数名ほどで、殆どの方は存じ上げませんでした。鎌田さんが如何に幅広い人脈を築いておられたか、改めて感心いたしました。ご挨拶された方々のお話は、残念ながら耳が遠くて聞き取りがほぼ困難でしたが、山折哲雄先生や高木慶子先生のお言葉の響きは、胸に沁み入るものがありました。セレモニーが終わった後に、鎌田さんの奥様と医師のご子息にご挨拶させていただきました。その時、奥様と鎌田さんの関係は、母と子の関係だと直感しました。この寛容な慈母ありてあの自由奔放な子あり、という感じですね。この親孝行息子は、夜寝る前に奥様の足を手で揉んでいると聞きました。余計なことをやってくれるもんだと思ったものです。こちらもやらないといけないのかな、とつい考えてしまいますから。

鎌田さんと小生の関係は、実はかなり特殊なもので、彼と近い人でも余り知らないのではないのでしょうか。人は死んでも死なないと思っていますので、ここでは鎌田さんに向かって、君付けで呼びかけてみます。



早いもので、そちらに移行してから、百日が経ったね。どうですか、そちらは。もう慣れましたか。いろいろ便利でしょう。欲しいものは直ぐに目の前に現われるし、どこかへ行こうと思えば、瞬間移動できるし。時間は過去・現在・未来の三時共存だし。君を偲ぶ会が三度(國學院、京都、亀岡の大本)も開かれるので、少し戸惑って

いるのではないかな。思えば、君は疾風怒濤の如くに日本列島を、いや世界中を駆け抜けたね。正に善財童子のように諸国の善知識を訪れて教えを請い、千手観音のように行く先々で縁を結び、実に多分野にわたる人脈のネットワークを広げたね。これはもう見事と言うほかない。君以外には誰もできない芸当だろうね。君は縁の行者とうそぶいていたけど、過去世で役の行者の弟子の末席を汚していた小生にとっても、君の姿は本当に眩しかった。

君は近くて遠い人、遠くて近い人だった。「讃岐男に阿波女」という言葉があるけど、互いに補い合う関係になればいいのにと思っていた。僕は讃岐(香川県)白鳥の出身、君は阿波(徳島県)阿南の出身で、出身地の距離は近いけど、人生の途中からずいぶん遠くへ飛んで行ったね。

年齢は僕が一才上だった。君との出会いは互いに大学院生の頃だったと思うけど、不思議な才能の持主がいるもんだと思った。君は『神界のフィールドワーク』(1985年)で学界に颯爽とデビューしたのだが、第一の主著と言っても過言ではない『記号と言霊』(1990年)の書評を、どういうわけか、僕が書くことになった。まず冒頭で次のように書いた。「この著者には何か自己変容や現状超越への燃えさかるような情念が秘められているように思う。」余りこんな書き出しで始まる書評もないだろうね。得体の知れぬ深い情念が燃えているように思った。確か、君は精神の病を患ったと言っていたけど、一箇所でじっと静かにいることができないと、こぼしたことがあったね。いつも何かに追い立てられているように、慌ただしく次の訪問先へと駆け出していた。これは想像だけど、君はその昔、吟遊詩人であった時に、皆との約束を果たせずにこの世を去った無念な想いが潜在意識に残っていたのではないかな。何かそのようなカルマ(業)があって、常にあちこち動いていたのではないかな。これは他人には分からぬことで、そのカルマの因縁が絶えるまで、放っておくしかない。それは修行癖の形でも現われたね。ただ、今度のは素晴らしかった。君は、京都の自宅から出発して比叡山西麓の山系を巡るコースを「東山修験道」と称して、八百回以上も山林抖数とそうを実践していたね。これも誰も真似ができないことだよ。

書評を書いて十一年目(2001年)に、君は博士論文「言霊思想の比較宗教学的的研究」を、筑波大学の荒木美智雄先生の許に提出したね。荒木先生は宗教学分野では大御所の名物教授だった。当時、荒木先生(京大の長谷正當先生の親友)に拾われて筑波大学で教えていた僕も、副査として審査に加わった。博論の内容は『記号と言霊』を少し補ったりメイク版とも言えるものだったが、口頭試問の際の受け答えは、実に見事だった。過不足なく的確に答えていたね。感心したよ。実は、あの博論の審査報告書を書いたのは、僕だったのだよ。荒木先生が余りにご多忙なので、僕が申し出て、書かせて貰ったという次第。

また、思い出すのは、2014年9月に同志社大学で日本宗教学会の大会が開かれた時のこと。君は研究仲間を集めてパネルの論陣を張った。この時のパネリストは、東大の鶴岡さん、筑波大の津城さん、高野山大の井上さん、それに京都府立医大の僕だったね。ところが、君は準備の途中で網膜剥離になってしまった。いい年になって何度もバク転なんかやるからじゃないか。緊急手術をした後、二週間余りの「床伏せ」修行が待っていた。君は、今度の網膜剥離は、いずれこの世から靈魂が剥離する絶好の訓練になったと、メールで書い

て来たね。ピンチをチャンスに変える発想はお見事の一語。大会当日、君はぎりぎりで間に合って、病後間もないのに立派に発表したね。フロアーからの訳の分からぬ批判めいた質問にも、堂々と明快に答えていた。「どんな玉(魂)でも、しっかりと受け止めて、打ち返さねばならない」と、メールに書いて来たことを覚えている。また、その一年半後(2016年2月)に、君は京大のこころの未来研究センター教授を定年退職することになり、記念講演会を京大の芝蘭会館で行なった。その時のスピーチも圧倒的なパフォーマンスだった。一時間を超える講演だったけど、一切原稿を見ずに、古今の詩歌を引用しながら、水が流れるが如く滔々としゃべったね。これは圧巻だった。その時に痛感したのは、君はやはり生来のパフォーマーだということ。学者でもあるけど、本質は完璧なパフォーマー。たぶん練習よりも本番に強い実践家。法螺や石笛やギターや歌や詩歌、これらを自在に操る神道ソングライターであり、学問をも芸道に昇華させようとした吟遊詩人の芸人、俳優だ。俳優は、「わざおぎ」とも読むけど、その片鱗は、能楽への強い関心にも現われたね。

そして、時は流れて、君が盲腸癌を患って、いよいよもう他界移行するという直前に、羽賀ヒカルさんの「神社チャンネル」の動画に出た。そこで君は「最後の歌」を披露していた。「やさしさ…うつくしさ…いのちの深さ…いのりの深さ」と、リフレインしながら、ギター抱えて歌うというより、最後の叫びを呟いていた。これが君の辿り着いた境地だったのか。これが君の絶唱だったのか。二年前の「絶体絶命」コンサートで聞いた雄叫びよりも、ずっと心に浸透したね。僕は心底、見事な人生の調べだったと思った。

もう四十九日はとっくに過ぎていたので、そちらでは、知りたいことがあれば、比較的簡単にアカシック・レコードにアクセスできるのではないかな。これは君の専門にも関わるので、敢えて触れておくれ。君は認めてなかったようだが、出雲口伝は、伝承過程で多少の間違ひはあったけど、概ね本当だろう。古事記や日本書紀は、神話時代から歴史時代の初めにかけて、勝者が歴史的事実を大きく書き換えているだろう。記紀神話を論じて来た君の業績が損なわれるとは思わないけど、君には本当の歴史を探究してもらいたかったという想いは強く残っている。ただ、多かれ少なかれ、この世の人たちの認識は、相当外れているので、歴史認識の違いは、余り問題ではないのかもしれない。それよりも、むしろ、僕としては、以前はコト論とタマ論を交差させ、後に「言 = 事 = 霊」と捉えた僕の言霊論を、君が評価してくれたのが嬉しかったね。

また、スピリチュアルケアを考察した僕の論文の中に、高木慶子先生への言及がないのを、君が不思議(むしろ不満)がっていたけど、あれは日本のスピリチュアルケアの理論的指導者を紹介していたのだよ。シスターや神父・牧師さんの献身的なケアのことは、よく知っているけど、キリスト教の枠内でのケアであるという印象は、どうしても免れないんだね。スピリチュアルケアを言うなら、スピリット自体が何なのか明確に言うべきではないかな。それは、宗教の認識枠組みを超えているもので、人間存在の本体である実在を指すものだよ。ケアをする側も、ケアをされる側も、人間の本体がスピリット(永遠の実在)であることに目覚めることが、スピリチュアルケアの本質ではないかなと、僕は思っている。眼の前で苦しんでいる人を助けることは、とても大事なことだけど、その苦しみがスピリットへの目覚めに繋がっていることに気付くことも、それに劣らず重要なことだと思うんだよ。

いずれにしても、もうだいぶ長くなったので、この辺で止めることにするね。生前中は、いろいろとお世話になったことに、改めて御礼を申し上げます。いずれ、そちらに戻るから（というのも、そちらこそが生命の拠点だから）、またお会いしましょう。See you later!

結ぶ会当日に参加者が頂いた緑色のファイルに記されていた君の献句

（始句）序破論は破より破へと轟きて

（終句）いのち道波より波へ引き断がれ

鎌田君への献句

吟遊の旅人の胸に彼岸花 （彼岸花＝曼珠沙華、花言葉は情熱）  
駆け抜ける修験道端の曼珠沙華  
天高く縁の行者の法螺ひびく

棚次正和 拝

2025/09/14